

パタゴニアイワインコは害鳥なのか?

Burrowing Parrots an agricultural pest?

By LIC. M. RITA PÉREZ, Biol. MAURICIO FAILLA, VERÓNICA SEIJAS, Dr. PETRA QUILLFELDT & Dr. JUAN F. MASELLO

シタシーンの読者にとってよく知られているパタゴニアイワインコは南米でも一番南に見られるオウムの 1 種である。アルゼンチンで、彼らはアンデス山脈スロープの北西部から南部のパタゴニア草原まで生息している。イワインコはコロニーの中で繁殖をし、砂岩や石灰岩、または崖にトンネルを掘って巣を作る。(シタシーン Vol 15 No 4: 12-13 と Vol 16 No 2: 7-9 と Vol 17 No 2: 12-14 参照)。以前、これらのオウムはアルゼンチンに多く生息していたが、19 世紀の後半から数が激減した。現在は限られた地方にだけ多く生息する(シタシーン Vol15 4: 12-13 参照)。

イワインコの数の減少の原因の一部としては、農作物病害鳥としての迫害を受けていること、草原が農作地に変えられていること、そしてペット貿易のための捕獲がある。

アルゼンチンでは、1963 年の農作物生産のアルゼンチン国家衛生保護法 (Argentinean National Law of Sanitary Defense of the Agricultural Production of 1963) で、イワインコは害鳥であると見なされるようになった。しかしながら、この件に関する前回の客観的な調査は、畑の縁 (ふち) の部分や、被害が散発的にあるのを除いて、全体の被害は決してひどいものではないという我々の印象と一致する。詳しいことは Bucher, E.H 氏が書いた 1992 年出版の *New World Parrots in Crisis: Solutions From Conservation Biology* に収められている *Neotropical parrots as agricultural pests* という記事を参照)。

被害はほとんどいつも農業作業の不手際、侵食、悪天候、水不足に関連している。それにも関わらず、鳥を殺す方法、例えば、巣への毒物投与、大規模な営巣地の破壊、眠りのために使われる木々の破壊、毒餌や鳥を撃ち殺すことなどが、本当の被害を数値で表すことも、代替手段やそれについての結果を考慮することなく、何年もアルゼンチンの様々な地域で行われてきた。2004 年 11 月以来、我々は、ほとんど知られていないイワインコの食べ物と、北東部のパタゴニアの地元農業との相互作用の詳細な研究を行っている。

これがイワインコの生息地であるエルコンドルである。(シタシーン Vol15 の No 4 12-13 参照)。

北東部パタゴニアの農家は、毎年イワインコが彼らの作物を完全に駄目にするという。しかしながらこの地域は農地の端地であり、その中のいくつかの場所は侵食が激しく、多くの場合、灌漑に頼っているので、彼らの主張の正当性を疑わざるを得ない。地方自治体は、野生生物、主にオウムや雁 (ガン) によって引き起こされる損害を、自治体が経済的に補償しなければならないのだ、と考える現地の農家達から何度も何千ドルもの要求を受けている。我々の研究の一部として、リオネグロ地区 野生生物課の所長である生物学者 Mauricio Failla, そして彼の妻、Veronica Seijas との共同で、エルコンドルのイワインコのコロニー周辺地域の農作物の被害の情報を集めるために、現地の農家にアンケートを配った。WPT と写真家 Don Preisler の高額な寄付により一部資金を得たこのプロジェクトは、農家達が鳥、特にイワインコによる、農作被害についてどういう見方をしているのかというのを知るのが主な目的だ。

我々が予想した鳥が与える農作物への被害と共に、この情報はイワインコによる被害の大きさの実情を知り、もし必要ならば、被害を少なくするための管理対策を提案する助けになる。農家が受け入れるような緩和対策を我々が作る必要があるなら、農家がこの問題をどのように認識しているのかを知ることは不可欠だ。2004 年 12 月と 2005 年 2 月の間に、Adolfo Alsina 区 (リオネグロ) と Patagones 区 (ブエノスアイレス) で 70 人の農家に尋ねた。これらは、エルコンドルのコロニーのイワインコの群れが、繁殖期に毎日訪れる地域である。これらの農家全員は、この農業に生活のすべてを頼っているわけではないことを念頭に置くことが大切だ。アンケートでは、作物と農地の特徴、鳥や野生動物一般によって与えられた被害の回

数、影響を受けた地域の大きさ、そして、被害をなくすために必要な有効な対策について尋ねた。インタビューをした農家ほとんどは、私たちの質問に非常に協力的で、我々は、大変感謝をしている。

この最初のアンケート結果は、被害のレベルは誇張されていたことを示した。Adolfo Alsina でインタビューをした 40 人の農家のうち、20 人（つまり、全体の 50%）しか、彼らの農作物が何らかの形で鳥に被害を受けたということを言わなかった。この数値は、農家と話をした後や彼らが自治体に提出した意見書を見た後に感想を抱くような被害の状態より随分と小さい。たった 7 人（全体の 18%）だけがイワインコによって被害を受けたと言及した。もう 8 人（20%）は、被害はイワインコと雁（ガン）の所為（せい）だと言った。最後に、5 人の農家（12%）は、オキナインコやフォークランドツグミやアリツカゲラなどの他の鳥が被害の原因となると指摘した。この地区でもっとも影響を受けたのは、秋にはトウモロコシ、夏と秋にはひまわり、秋にはカラス麦だった。農家達はヒエやアーモンドへの被害も指摘した。被害の状況は違っても、ほとんどの場合それは比較的少ない。トウモロコシは 10%から 100%の影響を受けたと農家達は言うが、ほとんどの場合、被害は 10 から 20%の間であり、2つの畑（5ヘクタールと 8ヘクタール）だけが深刻な被害を受けていた。

オウム達は、畑のふちから寄ってくるので、大きい畑の被害の方が、小さい畑のそれより深刻になりがちだということがわかっている。また、よく整地されていない畑（侵食と作物群が点在している）は、より影響を受け易い。（写真参照）カラス麦とひまわりの種も同じような状況だ。アルゼンチンの中でもオウムによる農作物の被害が一番ひどいと言われているパタゴニアの北東部では、11 人（37%）だけが鳥による作物のなんらかの被害を告げ、そのなかで 8 人だけがイワインコが被害の直接原因であると、現地 30 名に尋ねた我々のアンケートは明らかにしている。そして、その中で 6 人だけが、イワインコによる被害が彼らの収入に明らかに影響したと思っている。

この地域では、被害にあった主な作物は、夏には小麦とカラス麦だった。この地域で質問したほとんどの農家達は、どのくらいの広さが被害にあったのかという質問には答えてがらないのだが、被害は広い地域に及んだのだと主張する。彼らがはっきりとした大きさを示せないことから、彼らの主張の正当性が疑われる。調べた農家達の大部分が、鳥と特にオウムを撃ち殺すことが、作物の被害を抑えるために一番一般的に行われている方法であると言う。違法にもかかわらず、その中の何人かは、毒餌を被害対策として使っていると言った。しかし、調査したすべての農家達は、これらの 2つの方法は効果がなく、弾丸と毒の代金の法が作物の被害金額を超えていることを知っている。この地域の何名かの農家達は、被害防止として、オウムを殺さない方法を用いているという結果を得たのはいいニュースであった。例えば、種を撒く時、一箇所にまとめて撒いたり、被害が一番少ない時期に種まきと収穫を行ったり、オウムがあまり好きでない作物を、主要な作物の周りに植えたりする（通常ライ麦を小麦の周りに植える）。オウムを殺さず、オウムの被害を抑えている農家は、これらの方法はとても効果的だと言う。その上、これらの方法は費用もあまりかからない。

これから数ヶ月の間、どの地区が一番被害を受けているのかをはっきりと知るために我々はこのアンケートをもっと多くの農家に行うつもりだ。その後、一時的な被害や一番影響を受けた作物の被害を数値で表すつもりだ。現地の野生動物局と現地の農家の協力を得るこれらすべての情報は、インコによる被害が起こる場所では、エルコンドルのイワインコが傷つけられたり殺されたりしないようにしながら、その被害を軽減する管理対策を作るのに役立つだろう。

これからもシタシーンに最新情報を載せていく予定ですので、どうかお楽しみに！

In My Opinion--「私の意見」では投稿を紹介しします。これは、様々な意見を紹介する場であって、WPTの主張等とは必ずしも一致しない場合がありますのでご了承ください。

個人の鳥類飼養はオウム保護に重要か？ パート2
Does private aviculture matter to parrot conservation? part 2
By EB CRAVENS

保護活動家達が個人の鳥類飼養家達を見る見方は、鳥類飼養家達が鳥を飼うという環境に関係するのだ。このことに突然気が付いたのは、1991年に私が毎年行われる AFA 協議会の公演に出席していた時に遡る。ヨーロッパの後援者の一人が、アメリカの繁殖施設を訪れた時の事を話していた時にこう言った：「そのオウム達はカゴ (cage) に入れられている。私はそれらを鳥小屋 (aviaries) と呼ぶつもりはない」

そのセリフは、私が今まで見てきた単調でつまらない家畜小屋のような環境に何列にも重ねられるように置かれた飾りも何もない何百のオウムの鳥かごを思い起こさせた。床より高い所に置かれたこのような小ぶりでワイヤーがむき出しのカゴの中には2本の止まり木、巣箱、エサ、水入れが備え付けられていて、その中にいる知能の高い鳥達に与える刺激はないだけでなく、オウム達が備える自然な行動や潜在する本能的な知的理解力を引き出すものは何もないのである。そして、彼ら (繁殖家達) は、鳥類学者や鳥類保護活動家達の中から見た国際的な評判を落とすのだ。そのような陰鬱な無菌状態の生息場所からどれほどの科学的な知識が得れるというのだろうか？ のような状態に置かれたオウム達は、日々の活動の中でノイローゼ状態を示すのでないとすれば、不機能状態で、誤解を与えるような型にはまった行動を示しがちである。

ブリーダー達のある者は、鳥達の生存において、繁殖行為だけが残された華やかな行動であるという点にまで到達するほど生活の質を否定することによって、オウム達に繁殖を、無意識に強要するように思えることがある。つまり、そんな殺風景な環境で、オウムのつがいや他に何が出来るというのか？ 広い鳥小屋には木が植えてあって、地面、空、太陽、風、雨、茂み、草が植わっている土、穴の空いている木、木の実もあり、外には野鳥、見に来たり、呼び合ったりする他の同種のオウム達がいるような所で、繁殖して見てごらんください。同じつまらない加工された乾燥食品を毎日、年中通して与えるのを止めなさい。鳥小屋の中には、鳥達とその周り、下、そしてその上でいられるような自然の繁殖用の木穴を与えなさい。(彼らが、巣穴を守りさえでき、人間の侵入者に少し対抗出来るようなものを!) 彼らに何か目新しい事が出来るようなものや、エサを求めて探せるようなものを与えなさい。

そうして、そこにゆったりと座り、自分のオウム達が生き返る様子を眺める。そのように改善された状態では、あなたはオウムをただ繁殖させるということはないだろう。あなたは彼らに教え、そして、もちろん、あなたは彼らの自然のジェスチャーや模範が現れると同時に彼らから学び始めるだろう。そのような鳥小屋は飼い主にとって楽しく、学ぶところも多いだけでなく、鳥小屋を見に来た人々からの尊重をえ、科学的な分野において鳥飼養の地位を強化することになるかもしれない。もし、一時的でない個人の鳥飼養が、世界のオウム保護に本当に重要になるには、そのような地位を獲得しなくてはならない。それは、基準を上げることを意味する。これは、我々が受け継いできた貧困なイメージを何年もかけて壊す努力をも意味する。あなたの繁殖した群れで、何が保護活動を強調するのか？ いくつもケージのある量産から、鳥の数の少ない質へとあなたの焦点を切り替えなさい。一種のオウムにしぼる、または、研究に役立つグループになるような何代もの家系を作るために、何種かのオウムに集中するための自覚のある努力をなさい。

これは CITES の I にある絶滅の危機に瀕した種である必要はない。多くのオウム種は野生で減っているので、今後、10年、20年、30年後にどの種が危機に瀕するかをはっきりと予想できるものはいない。もし、決められないなら、あまり飼われていないものを選ぶ。これは、野生で数が少ないものや生息地が小さいものであることを示すことが多い。

更に、もし、個人の鳥飼養が実際に以前は数が多く、しかし、繁殖するのが難しいオウムを失うのであれば、これ自体は失敗を意味し、多分、保護実在として取上げる価値はないであろう。私が20年以上も前にした選択はアオボウシインコであった。それは、希少価値や保護の必要性とはなんの関係もなかった。こ

これは、この種への興味が生涯の研究と友情に愛情と献身を捧げることができると思ったから。10年以上経って、キビタイボウシインコが鳥飼養で見られる数が少なくなってきた。そして、私は彼らの生息場所で彼らがどれほど安全に暮らせるのか心配している。繁殖プログラムで一度でもうまく行っていたら、あなたのヒナの一羽一羽とそれがその種にどう役立つかの可能性をよく考えて見て欲しい。メスの方が大切なのか、人の刷り込みのないよくトレーニングされたオスの方が大切なのかよく考えること。ボウシインコ、アケボノインコ、コンゴウインコなど違う種類のヒナを一緒にすることを避け、同じ種だけのヒナを育てること。違う種の間で、鳴き声「汚染」が起こらないように、鳴き声が聞こえないようにすること。例えば、コミドリコンゴウインコやゴシキメキシコインコやミカヅキインコなどを選び、管理下のコロニーの生息環境で繁殖された若い鳥が成鳥から学べるようにする。以前、野生で捕まえられた個体すべてをあなたのヒナを教育できる野生の先生だと思い大切に下さい（例え、もう繁殖能力を失ったものでも）。

明らかに、まだまだ道のりは遠い。現在まで、個人の繁殖家は鳥の世代ごとに、その能力と本能に関して、前世代から取り除いてきた。この傾向を変える。そうすれば保護家としてのタイトルを得る過程に乗れるだろう。

写真注釈

Parrot freeflight is perilous, but it is one way to train chicks to be more savvy than their captive parents.

鳥小屋は危険でもあるが、ヒナをもっと賢く育てる一つの方法でもある。

Is it really conservation to produce psittacines which can only survive in cages?

ケージの中でしか生き残れないオウム類を繁殖させてそれが保護なのか？

Keeping only one parrot in a genus practically eliminates the chances of offspring learning many non-species calls or mannerisms.

一属に一羽のオウムを置くことで、ヒナが違う種の鳴き方やパターンを学ぶことを避けれる。

Natural environments bring out a greater number of scientifically valid avian behaviours.

自然の環境は、科学的に有効な鳥の行動を引き出す。

ムラクモインコ – アフリカのオウム

アフリカのオウム保護のためのリサーチセンター

The Meyer's Parrot - an African parrot

Research Centre for African Parrot Conservation

By STEVE BOYES

アフリカのオウムの中で一番分布が広く、その生息地でよく見られるムラクモインコ(*Poicephalus meyeri*) はアフリカ大陸の生活に一番向いていると思われる。野生のムラクモインコは以前あまり研究されておらず、彼らの生息地で何が重要なのかはあまり知られていない。これまで、ムラクモインコの保護活動は行われていなかった。捕獲や追いやりがひどくなっているように、アフリカ大陸で起こっている変化は、このあまり知られていない種への脅威になっているようだ。人々が彼らの生息地へ進出しているため、この種は作物への害鳥として見られている。結果、人とこのオウムとの間の問題は深刻になり、正しく管理される必要性がでてきた。アフリカオウム保護リサーチセンターは (RAPC)、チャガシラハネナガインコ、クロクモインコ、ハネナガインコ、キビタイハネナガインコなどを観察してきた。つまり、数が減り、分布が狭くなっている *Poicephalus* 属 (ハネナガインコ類) の種々を専門に研究してきた。ムラクモインコプロジェクトは 2004 年に、生息地の南端、ボツワナの Okavango デルタ (三角州) で始まった。

このプロジェクトはムラクモインコの亜種 *Poicephalus m. damarensis* と *Poicephalus m. transvaalensis* の 2 亜種の関わり調べていた。これらの 2 亜種は頭に黄色い模様があることで見分けられ、南アフリカの北部の省で農作物の害鳥として追い立てられたため、無理やり一緒の場所にいることになった。この研究により、もう少し広範囲にわたるようデザインされ、なぜこのオウムはアフリカでうまく適応でき、6 種の亜種をその分布地ないで持つことが出来たのかという答えを探すべく行われた。Okavango デルタでの研究は、こ

の鳥の広範囲にわたる分布は、広葉樹またはサバンナの林などを好む繁殖地の条件に対する融通が利く性質によってサポートされているのだということを示している。

2006年の調査も Okavango デルタで続いて行われる予定だ。営巣地の特徴、生息地の好み、一年を通して餌の内容がどう変わるのか、日常の飛行行動、繁殖行動、鳴き声などを調べ、2007年のアフリカ全土の亜種の分析の助けになるはずだ。このデータは、この種に必要なものは何なのかを初めて教えてくれ、アフリカオウム保護の基準をくれるだろう。Poicephalus に属するものは、ムラクモインコと同じラインからきていると推察する。これは、ムラクモの分布が他の Poicephalus 種のすべてに接触するという事実からも支持される。これらの種のすべてに地理的に通じる種は他にはない。ムラクモインコはその分布地のすべてで、食べ物に偏りが無いことで知られている。一方で、その他の Poicephalus 種は、彼らの生息地の中で、度合いは違っても、好まれる食べ物の数が限られていることがわかっている。基本的に、亜種が新しい生息地のタイプや植物群に適応できるように、特定の食べ物に頼るようになり、時間と共に新しい種が進化するようになるのではないかと仮定することができる。できるだけ多くの Poicephalus 種とその亜種から取った血液の DNA 分析は、Poicephalus 種間の系統学的関係を知るのに使うことができる。食べ物や新しい生息場所のタイプに合わせ体に変化するのには、とても長い時間がかかる（例えば、くちばしが大きくなるとか、体が小さくなるなど）、したがって、長い期間に、その種が生息地の変化にもろく、特にもしこれらの変化が食べ物やこの“まだ進化中の若い種”が必要としている巣穴などに影響した場合（例えば、南アフリカで Yellowwood といわれる木の収穫が、ハネナガインコ Poicephalus robustus robustus の数の減少をもたらした）影響されやすい。

Poicephalus の種の中での交配が飼われているオウムの中で観察され、それは野生でも報告がある。ムラクモは、クロクモインコとチャガシラハネナガインコの2種と交配することが飼育下で確認され、彼らが接触する野生の分布地の中では、広範囲にわたって交配が行われているという報告がある。これは、Poicephalus の種同士が遺伝的にとても近いことの証拠である。では、種の多様性保護をどう優先させればいいのか？絶滅の危機に瀕している種に焦点をあて、それによって、予算を割り当てるべきだろうか？そう、研究の投資は絶滅危機種に焦点をあてるべきだが、どうやって、そのステータスを調べ、そして、どの方法を前もって選べばいいのか？

ムラクモインコプロジェクトは、ムラクモから分かれ進化する可能性、種としての年齢の関係、生存を脅かすものによる数の減少の仕方、そして、新しい種、つまり、変化に弱い種を明らかにする方法として DNA 分析を使う可能性などを調査することによって、これらの理論上の問題に取り組むのに使える。現存する指針と共に用いることによって、将来、保護活動のどこに優先順位をおけばいいのかを知るために使うこともできる。もちろん、議論は、例えば、その他の数限りない関係や要因によって、どのような因果関係でも影響を受けるという事実により影響を受ける。種としての年齢と数の減少傾向が成り立つためには、気候は同じでなければならず、外来種は持ち込まれず、捕獲や貿易は、観察されている種のなかで同じでなければならない。

Okavango デルタでの1年半のムラクモインコプロジェクトは、興味深い結果をすでにもたらしている。Okavango デルタの北西にある Kwedi Concession に調査場所があるが、ここは、様々な生息地のタイプがあることで知られている（11種の土地分類があてはまる）。プロジェクトの最初の年は、繁殖行動、餌探し、営巣地の特徴などを中心にし、研究場所の地理の把握、植物群のリスト作成、気候の記録、果物を食べる鳥の年内を通してのえさの変化（ムラクモの食物の変化と比較）も行った。そこには、51種の餌となりえるものがある。Sausage Tree の花と実、Kigelia africana, Silver Terminalia の豆、熟していない African Ebony の実、African Mangostene, Marula Sclerocarya, Caffra, そして Sycamore Fig などである。2004と2005年にわたって、オウム達が38品目の餌を食べていることが観察された。サルとの食べ物をめぐっての競争を避けるため、オウム達は、まだ熟しきっていない実を食べる。木の上で、バブーンや猿が餌を食べているところでは、オウムは決して見られない。これらのオウム達は果実の芯部分や種を食べるが、果実自体を食べることはほとんどない。次期の研究では、ヒナが何を食べたのかという分析も行うつもりだ。これらのオウムは、その他の果実を食べる野鳥とも一緒になって餌を食べる。彼らが、食べ争ったり、何かを守ろうとするようなことをするのは、繁殖や夜休むための巣の近くに他の鳥が来た時だけである。鷹類 (Little Sparrowhawk) が、巣立ったばかりのヒナを捕まえようとするのをうまくかわしたのが観察され

た。そして、巢が、鷹類 (Gymnogone, African Fish Eagle) や爬虫類 (Tree Monitor) に襲われたのも観察された。Gymnogone はアフリカの生息する鷲の一種で、ムラクモインコの営巣地を調べている様子が観察されている。したがって、ムラクモインコの一番の天敵ではないかと思われる。

ムラクモは巢に適した穴を以下の鳥と取り合いする；ライラックニシブッポウソウ (Coracias caudatus), Burchell's starlings ムクドリ的一种 (Lamprotornis australis), セネガルショウビン (Halcyon senegalensis), and Red-billed Woodhoopoes ブッポウソウの一種 (Phoeniculus purpurea)。オウム達は、他の鳥が作った穴に巣をつくるのだが、入り口を大きくしたり、中を大きくするために掘ったりする行動は観察されている。ムラクモの繁殖季である4月から7月にかけて、使われている12の巣穴のうち、10が Knobthorn Acacia というアカシアの木にあり、残りの2つは Boaboab と Mopane という木にある。オウム達は、ゴシキドリや啄木鳥によって彫られ、地上から6-12mに位置し、枯れてしまった、又は、上のほうが枯れている木にある穴を好むようだ。

Knobthorn アカシアという木は、象に木の皮をむかれたりして、ひどく傷つけられる。したがって、木の頂上付近が枯れる。したがって、象の木を破壊する行為がなくなれば、枯れる木はへり、ムラクモインコの巢に適した木がなくなることになる。巣穴のある Knobthorn アカシアのすべてには、頂上付近で枯れた部分があり、象が傷つけた跡が見られる。

この時点まで、我々は RAPC と Wilderness Safaris に資金等を頼っており、したがって、資金には限りがある。我々が使った乗り物は1972年型のランドローヴァーで、2つの雨季を乗り越えた。Okavango Wilderness Safaris は調査地への足と理想的な研究場所を提供してくれた。しかし、ムラクモインコは絶滅危機種ではないので、研究資金を得るのは難しい。研究を次の次元に進めるため、ムラクモインコを中心として、その他の Poicephalus に属する9種の研究もできるように、更なる資金が必要だ。このプロジェクトは交通費、生活費、そしてアフリカの中心と東で行われる9ヶ月の研究のための旅費が必要である。プロジェクトはムラクモインコの6種の亜種のデータを集めること、Poicephalus 種の系統学的関係をDNA分析を通し明らかにするため、できるだけ多くの Poicephalus に属する種と亜種から血液サンプルを得ることに焦点を当てる。

プロジェクトはムラクモインコ、Poicephalus 種についての経歴を完成させ、それは、貴重なプロジェクトとなる。寄付又は技術的な手伝い（例えばDNA分析）などが出来る個人、又は、エージェンシーがおられたら、私 Steve Boyes、Mike Perrin 教授に連絡いただければありがたい。詳しい情報はワールドパロットトラストに連絡していただきたい。アフリカのオウム保護リサーチセンターはNPOであり、研究のグラントそして資金への寄付管理の経験がある。

写真注釈:

Meyer's Parrot feeding on a Sausage Tree flower (Kigelia africana).

ムラクモインコが Sausage Tree の花を食べている。

Typical landscape of the Okavango Delta in flood 2005. Riverine forest is the primary habitat of the Meyer's at this time of year.

Okavango デルタの典型的な様子。2005年の洪水。この時期、川近くの森がムラクモインコの主な生息地になる。

Fledgling Meyer's Parrot feeding on the Sausage fruit Kigelia africana. Stripping the fruit in half to expose the seeds.

Sausage の木の実を食べるムラクモの巣立ったヒナ。果実を二つに割り、中の種を取り出す。

Meyer's Parrot nesting in a dead Knobthorn Acacia (Acacia nigrescens) - this was an active nest site producing one fledgling.

Knobthorn アカシアに巣を持つムラクモインコ。この巣からは1羽のヒナが巣立った。